

大阪のいちびりさん集まりまし展 2019年12月7日～27日 大阪府立中之島図書館

	出展者	活動紹介	
1	おまけやZUNZO 宮本順三(故人)	グリコのおもちゃデザイナー・洋画家の故宮本順三氏の作品(豆玩具・絵画)と日本・世界のミニチュアと人形玩具、仮面など民族文化資料を展示。平成29年度東大阪市地域街づくり活動助成金事業「文化の駅」オープン。大阪・東大阪にゆかりの宮本順三が愛した街の歩みパネルや地域情報発信、名物など歴史や文化の発信拠点としている。	第2回準大賞
2	万博ミュージアム 白井達郎	白井達郎さんは“日本一の大阪万博グッズコレクター”として知られる。万博関連のグッズ・資料約1万点を収集し、自宅の一室を「万博ミュージアム」として開放(現在は休館中)。招致ムードが高まる現在、各地のイベントに展示品を貸し出し、グッズを通じて万博の魅力を講演している。	第8回特別賞
3	たなかやすこおはなし会 田中やすこ	大阪弁で昔話や戦中戦後の暮らし、文学作品など語り続けている「ちいちゃいおはなし会」。朗読とは違い顔をみながら語りかける「おはなし」は懐かしく不思議な世界に誘ってくれる。1975年から大阪弁の語り「たなかやすこおはなし会」を主宰。以後44年にわたり大阪弁で語り続け持ち話が100話を超えた。小冊子「おはなしのたび」(年2回)を発行。	第9回大賞
4	大阪春秋 福山琢磨	昭和48年11月、大阪商工会議所で文化担当委員として活動していた堀内宏昭氏が「大阪の市民文化運動を起こそう」と創刊。大阪の歴史と文化を愛好する各界の人々が集まって編集し、郷土雑誌として多くのファンを得るまでに成長。昭和62年、堀内代表死去の後、株式会社三幸の支援のもと山田政弥氏が第50号から編集発行人となり発行を継続。しかし平成15年、支援が打ち切られ一時休刊。平成16年、株式会社新風書房社長・福山琢磨氏が発行人となり従来の編集方針を引き継いだ114号を新装復刊している。	第11回石浜恒夫記念賞
5	なにわ言葉のつどい 中井正明(故人)	関西弁でも大阪弁でもない「なにわことば」。関西弁は関西(近畿全体)に広がり、大阪弁は大阪市中のみならず、摂津・河内・和泉のことばを含む。それと比べて「なにわことば」は基本的に船場・島之内界隈に伝わる上品なことばなのである。それが消えかかったり、誤用されたりしている。これでは伝統はまもれない。使いまひよ、広めまひよ、伝えまひよ、を合い言葉に「なにわことばのつどい」が結成されたのは1983年。ひたすら「なにわことば」を愛してきた。	第12回大賞
6	寄席情報誌「よせびっ！」 日高美恵	多くの人に気軽に寄席を楽しんでもらおうと、上方落語情報誌として平成18年に女性ばかりで立ち上げた月刊フリーペーパー。発行部数は約6000部。配布場所は、京阪神の主要ホール、劇場、大阪商工会議所、東京の国立演芸場や横浜にぎわい座など、関西一円の寄席情報だけでなく、出版情報、リレーエッセイ、演芸トピックスのほか、落語イラストなども掲載されていて楽しく役に立つ内容である。	第13回準大賞
7	関西・歌舞伎を愛する会	関西での歌舞伎公演が危機的な状況となり、「何か手をうたなければ、歌舞伎発祥の地で公演が見られなくなる」と、昭和53年(1978年)に結成。行政、経済界、労働界、文化人、市民の方々が結集した。翌年の朝日座公演から毎年7月に歌舞伎公演を実施。道頓堀に復活させた「船乗り込み」は夏の風物詩として定着している。	第13回準大賞
8	昭和レトロ家電 ますだけんいち	小さなころから何故か「昭和」の時代に惹かれてきた増田さん。特に昭和30年代、私たちの生活が一気に近代化していった高度成長の時代を映し出す家電製品の数々をコレクションし始めておよそ30年。その中味は、いわゆる三種の神器と当時呼ばれて庶民の憧れだった「白黒テレビ」「洗濯機」「冷蔵庫」を筆頭に、ユニークなものまで幅広いコレクション。出版に、くらしの今昔館での企画展とさらに活躍は続いている。	第14回特別賞
9	(株)旭創業	「ランチをチャージングに」。そんな思いからネーミングされたのが、誰もが知っているポリエチレン製の醤油差しである。大阪のいちびり精神に目をつけ、昭和32年(1957)広島から大阪へ乗り込み、旭食品工業(現旭創業)が設立された。以降、魚やブタなどさまざまなバリエーションの商品を製造・販売される一方、アイデアは独占すべきではないという観点から、特許申請をしなかった。	第15回大賞 会員
10	目樽工房 妹尾保雄	なにわのガリバー木工師こと妹尾保雄さんは、定年退職をきっかけに木工師となる。「田辺寄席」「繁昌亭」をはじめ数々の寄席小屋や「てんのじ村」石碑などを、精巧なミニチュアで復元されています。また上方落語には欠かせない見台にも組立式の工夫を加えられ、50人以上の噺さんが愛用している。	第15回特別賞
11	明治安田生命 関西を考える会	昭和51年(1976年)、当時の明治生命の創業95周年にあたり、「地域に貢献できる記念活動を」との願いから、大阪勤務の職員の有志があつまりスタート。毎年一つのテーマを決めてそのテーマに沿って、著名でかつ様々なジャンルの方々から原稿を募り一冊の冊子に仕上げるというユニークな作業を続けています。今年のテーマ「関西の風物誌」は6月に発行した。	第16回準大賞
12	不易糊工業株式会社	幼児期から図工等に愛用されるフェキ糊。情操教育にも広く貢献しています。今や世界の工場となっている中国産ではなく変わらず国産なのもスゴイ！容器がカップ型&チューブ。ずっと同じデザイン。これだけ変化激しい世の中で、維持し支持されている商品を送りだしている会社はすばらしい。当に不易流行から名づけた社名の如し。フェキ君キャラクターのコラボ商品を誕生させるスピリットがいちびり！	第17回準大賞
13	手書き職人、舞台装置家 竹内志朗	舞台装置デザイン画5万枚、テレビ・映画タイトル文字230万枚！ひとりの人間が一生かけてこなせる範疇を遥かに超えている。「新婚さんいらっしゃい！」「プロポーズ大作戦」「必殺シリーズ」など手がけた作品はテレビや舞台を通して何度も私たちが目にしています。裏方に徹し仕事を敬愛し80歳を越えた今も現役バリバリで活動する“生涯一職人”。	第18回大賞
14	上方芸能	1968年の創刊以来、上方の芸能全般を取り上げる雑誌として「能・狂言・歌舞伎・文楽・日本舞踊・上方舞・邦楽・現代演劇・歌劇・落語・漫才」など幅広いジャンルを取り扱ってきたが、2016年5月に終刊。～『上方芸能』は今号をもって終刊を迎える。48年間に200号を刊行することができたのは、創刊以来、多くの皆様に支えられ、育てていただいたお蔭だ。長年にわたるご支援とご協力に改めて深く感謝申し上げます。(中略)上方芸能は止まることなく未来に向かって続いていく。これからさまざまな方法や思いで応援することをお約束し、最後のご挨拶とさせていただきます。～終刊の挨拶	第19回特別賞

15	大阪アドリブバー千代崎 石原宣夫	水都再生で木津川の河川敷が整備される時、自然作家である石原氏が中心となり地域と行政が協議して子供達の故郷作りとして果樹を植えピオトープを作る。それから10年、行政に頼らず町会費を使い丁寧に維持管理し、蜜柑や山桃がたわわに実り豊かな故郷になった。一般的な都市の木々と違い果樹栽培をすることで豊かな四季を感じるリバーサイドにしている。子供への情操教育とまちづくりを地域が一体となって活動・実践している。	第19回大賞
16	切り抜き絵作家 酒井南斎(博文)	大阪の風景や風物を「切り抜き絵」によって表現。細かな下絵を作成、黒画用紙に転写しカッターで切り抜き作品に色づけする切り抜き絵。メインとなる作品は「なにわ三十六景」ではじめ、大阪の風景・風物を現在約70点以上制作。大阪の魅力を広くアピールするための作品を制作し続けている。	第20回準大賞 会員
17	A-yan 田中やんぶ	アートに携わる人々の創作活動を支援する非営利団体です。2005年2月、A-yan!!の前身「関西をアートで盛り上げる会」が活動開始。同年10月には御堂筋パレードに出場し、毎日放送で特番として放送された。現在に至るまで、様々なアーティストの活躍の場を作り、卒業を見送ったアーティストもたくさんいる。人材の入れ替わりや時代の流れなど、様々に変化してきた部分も多くあるが、基本的な理念は設立当初から全く変わる所がない。	第20回特別賞
18	大阪まちプロデュース 道頓堀並木座 山根秀宣	大阪のまちづくりを中心に幅広い活動を実践する「大阪まちプロデュース」。その中でも、『水辺再生』の取り組みは2002年から。2008年10月に川床「北浜テラス」が社会実験として3箇所実現。事務局として「北浜テラス」を存続させる活動へと昇華し河川敷の占用許可を得て常設の「川床」が15か所実現している。『道頓堀並木座』は「回り舞台」や「セリ」など世界標準になった舞台装置を生んだ「劇場都市・道頓堀」復活の夢を実現させるべく今春オープン。	第21回大阪観光局特別賞
19	東大阪の工場写真 川勝 親	東大阪市高井田で溶接を専門とする全国から難しい金型部品が持ち込まれという職人さん。東大阪市内には最盛期に製造業の事業所が約1万軒あったが半減。「モノづくりのまち」の、せめて変わりゆく町工場の姿、職人の姿を写真に残そうと2003年から撮りためた写真は2万枚以上。『写真を見てもらいながら、語り部のように語りたい』。	第21回準大賞
20	特定NPO法人 ブルボランティア 岡崎徹・織田智子	「障がい者に水泳を教える…」どこにでもありそうでないのがこの活動。NPOとして組織的にやっているのは日本中で大阪のブル・ボランティアだけである。20年前に障がい者のことを全然知らない「ド素人」の元ビジネスマンと元デパガが始めた活動。ド素人だからこそできる発想と工夫が売りである。数々の疑問に「なんでやねん！」と行動を始めて20年。ポスター、パンフレット、HP、運営システムなど「大阪ならではのいちびり精神」溢れたデザインが楽しい。	第22回準大賞
21	照明塾 塾長、橋田裕司	「心が楽しくなるあかり 楽になるあかり」をモットーに、やさしく温かみのあるあかりを手作りし人々の暮らしや心を照らす活動を続けている。照明機器メーカーのデザイナーで36歳のときにもって社会に関わりたくと独立。1996年から開いている「手作り照明教室」では参加者それぞれの個性を生かす手法で、照明作りを指導。そけらの作品を子供たちが入院する病院やホスピスなどに寄贈する活動「あかりバンク」をスタート。	第22回特別賞
22	なにわ名物開発研究会	トロフィー、なにわ名物白書・なにわニュース	主催団体
23	株式会社つせ	老舗が所有する包装紙、店舗写真、所蔵品などの展示	会員
24	木村アルミ箔株式会社	海苔カップ、食べる器、よそとちゃうことせなアカン	会員
25	岸本吉二商店	江戸時代から使われていた菰樽、ミニ菰樽、などの展示	会員
26	株式会社せのや	明治時代の店舗の絵、引き札、大正時代マッチラベルなど	会員